

「でもさ」

パソコンの前で突っ伏した奏は、後ろにいる兄に声をかける。

朔川家の長男である弾は、父親の外見的遺伝形質がまったく見られない端正な顔を上げた。

「これってどこから手を付けなければいいのよお……」

そう言って奏は兄に振り向いた。涙こそ浮かんではいないが、それはまさに『泣き顔』であった。

それはそうだろう。

先日のデモで外国人参政権の危険性、ひいては日本の危険な状況には気付いたものの、必要な情報やら知識は皆無に等しい。

ならばと思つて情報をあさってみようとしたものの、それらはあまりに膨大であった。

いったいどこから手を着ければよいのやら。

関連するサイトやブログが多いのだ。どれから読めば良いのか全く分からない。

これでは埒があかない、と検索上位に上がってきたサイトなどをクリックしてみた。

しかし、書いてある事が難解で理解できなかつたり、日記のようにその時その時の感想が書いてあつたりで全体像が見えなかつたり。

子供と言つても差し支えない十三歳に、これは過酷に過ぎる状況だった。

「確かにな」

弾もそこには同情できるのか、いたましように妹を見る。

この兄、父から素直に教育を受けたおかげでそれなりに下地はできている。が、それでも自分で調べようと思つた時に右往左往したことはある。奏の気持ちは痛いほどよくわかる。

とはいえ弾も何かから伝えればいいのかよく分からない。なまじ父の洗脳を素直に受けすぎたせいで、元々素養がなかった人間にものを教えるには何がいいのか分からないのだ。

「できればそれ系の本でも読んでもらいたいんだけど」

「ソレケイって？」

「政治関係の本。親父がいっぱい持つてるだろ」

「えー」

露骨に嫌そうな表情と声が上がってきた。

「あれ、ちよつと難しくない？」

日頃漫画しか読まない（読んでもケータイ小説レベル）奏にとつて、それは難攻不落の要塞に突撃するようなものだった。

「馴れると簡単なんだけどな」

「それまでに外国人参政権問題が片付いてるよ」

肩を落とす奏は、うーんと唸ったまま考え込んでしまう。

やれやれ、と肩をすくめた弾は、この出来の悪い妹をいかに啓蒙しようかと様々な企みを考える。

手っ取り早いところは嫌韓流なのだろう。また、ゴーマニズム宣言の戦争論なども良いのかもしれない。

だが、どちらも劇物としての性格が強い。

それに、どちらもある程度素養が出来てから読んだ方が良さうな気もする。

出来ればもつと根本的な部分から。

国や自分達同胞を大事にするという事を身につけてもらいたい。

他の知識なんてのは、その上にのっけていけば良い。でないところかちぐはぐな片手落ちの愛国者になってしまう。

（さて、どうするか）

考える事数分。

ふと自分がかつて読んだ本を思い出す。

分かり易く手軽に読めて、それでいて必要な事がほぼ全て網羅されていた。

「奏」

「うん？」

「ちよつと待ってろ」

そういつて部屋から出た弾は、そのまま自分の部屋へと向かっていった。

ほどなく戻ってきた弾は、奏に一冊の本を差し出した。  
「なにこれ……………。『民間防衛』？」

赤く分厚い本である。拒否感と拒絶反応がこみ上げてくる。奏は文字だらけの本へのアレルギー体質を自認している。

だが弾はそれを渡すと、

「それならたぶん簡単に読める。ネットあさるのも親父の本棚眺めるのもいいけど、まずはそれから読んでみな」

そういつて弾はニヤリと笑った。

もともと永世中立国であるスイスが自国防衛の為に国民に渡したパンフレットが基になってる本である。読みやすさは折り紙付きだ。

日本とスイスとで多少は違う部分も出てくるが、基本的な所は一緒なので問題はなからう。何より最初から最後まで国を守るといふ事について書いてあるのが良い。

それも単に戦争になった場合の対処方法だけではない。

戦争以前の情報戦についても書いてあるのが良い。

「うーん」

奏は唸ったまま考え込んでいるが、やがて意を決して読み始めた。

最初の一ページが終わり、次のページへ。

それが終わって更に次のページへ。

途切れることなく読み進めていくのを見届けて、弾は部屋から出て行った。

「どうだった？」

部屋の外で待機していた父と母が、息子に成果を尋ねてくる。

長男はニヤツと笑って指でわかを作った。

「バッチリ」

両親は即座にガッツポーズをとった。

(国民としての)勉強が遅々としてはかどってなかった娘を心配

していた両親であるが、これでその懸念が多少はとれたらしい。  
今後二人（というより父一人）はあれやこれやと教育を施していくだろう。

だが、その最初の第一歩をしくじると、後々まで嫌悪感や苦手意識を抱える事になる。それを克服するのは並大抵ではない。不可能と言つて良い。

できれば本人が興味を持って学んでいってくれるのが良いのだが、それが頓挫しかけていて二人はやきもきしていた。

が、その懸念もここで終わりそうだ。

娘の部屋から出てきた息子が、民間防衛をもつて妹の部屋に入つていった、両親は全ての問題が解決されていくのを感じた。

「さてと」

「ん？」

「お茶とお握りを用意するわ」

母はそういつて台所に向かつていく。

娘の勉強具合を確かめにいくのが目的だろう。

「なら、俺も」

公平もそれに便乗しようとする。

だが、それは妻と息子の拒否権によってあえなく否決された。

「あなたが行ったら奏がひくわよ」

「親父はもう少し大人しくしてくれ」

この男のことだ。いつもの調子でまくしたて、娘にうるさかられるのがオチである。

それが分かっているから二人は父の熱意をはねのけることにした。

（しようがないわよね）

（仕方ないよな）

見るも無惨な表情を浮かべる一家の大黒柱を見て、二人はそう判断した。